

図書館分科会 「Web Discovery Service による 教育研究資源の見える化を考える」講評

鈴木 正紀
文教大学図書館、CAUA 運営委員

ネットワーク上に存在する学習・教育・研究資源は、データベース、電子ジャーナル、機関あるいは個人のウェブサイト等として生産、整備され、質量ともに飛躍的な増大を続けている。ただ、現在のところそれらは、それぞれのプラットフォームで提供されているのが普通であり、利用者からすると、それらを統合的に利用するという環境が十分整備されていないという現実がある。いくつかのベンダーから提供されている横断検索（integrated search）システムはそのひとつの対応方法であるが、レスポンスが遅かったり、結果の表示においてどのコンテンツが探索者にとってもっとも有益かということ判断する上で十分とは言い難い。

図書館分科会は、こうした現状認識のもと、分科会テーマを「Web Discovery Service による教育研究資源の見える化」とし、九州大学附属図書館の工藤絵里子氏、株式会社サンメディアの松下茂氏から講演をいただいた。講演タイトルは以下の通りである。

- 工藤絵里子氏「すべての図書館コンテンツを一つのプラットフォームに：ディスカバリ・インターフェース『Cute.Catalog』のデザイン、開発」
- 松下茂氏「たった一つの検索窓から学術情報を自由自在に活用 Web Scale Discovery Service ～ Summon」

工藤氏は、九州大学附属図書館が提供するコンテンツ（資料の所蔵情報、電子ジャーナル、電子ブック、文献データベース、機関リポジトリなどを統合的なインターフェイス（検索窓は一つ）で検索し、結果を検索条件に対する適合度によって一元的に表示するというシステムを紹介した。使用しているのは海外製のオープンソースであり、それを日本語化している。

松下氏は、「Google のように速く、簡単に信頼できる図書館の資料を検索！」というコンセプトのもとに開発された、米国 Serials Solutions 社の Summon（サモン）を紹介した。これは、コンテンツ・プロバイダーが提供するさまざまなデジタル・リソースを統合的環境で提供しようというシステムである。横断検索システムとの違いは、メタデータをあらかじめコンテンツ・プロバイダーから入手し、標準化作業を行って、高速検索を可能とするような状態に整備しているという点である。

いずれの講演にも共通しているのは、多様なリソースをシンプルな環境で検索する、ということである。ちょうどネット上の情報が飛躍的に増えた際に、現在の Google 型の検索が利用者に支持されたのと同様の動きのように映る。

商用ディスカバリ・サービスは Summon 以外のものも市場に出回っており、今後国内でも導入が進むものと思われる。一方、九州大学での開発は、開発の 1 プロセスとして Summon をも取り込もうという大きな枠組みのもとに行われている。今後の展開に注目していきたい。